

待ちに待った開港祭

小5 折下陽琉



「第41回横浜開港祭2022」の取材をしました。3年ぶりの通常開催だそうです。会場が一番印象に残ったのは「LANTERN PORT」です。海上に約1000個のランタンがつけられていてかっこいいと思いました。ランタンには、横浜市民に募集した「コロナが終わった後にやりたいこと」などが書かれていて、およそ4ヶ月かけて作られたそうです。

また、「サイワークス」のブースで実際にドローンを操作することができました。「DJI Ryze Tello」というドローンを操作しました。最大飛行距離は100m、最大飛行時間は13分、最大速度は28.8km/h、運用限界高度は30mです。重さは80gで思ったより軽かったです。操縦は難しかったけれど、スクールの人たちが丁寧に教えてくれたので、正確に操縦することができました。コントローラーはゲーム（プロコントローラーなど）のコントローラーに似ていました。スクールでは、ドローンの安全に関わる知識と、操縦技能を学ぶことができ、パイロットの資格もとることができるそうです。これらのイベント以外にも様々な屋台やお店、イベントがありました。来年の開港祭も楽しみです。(2022.6.2)

のそいてみたよFMヨコハマ

小5 馬場航平



僕たちはランドマークタワーにあるFMヨコハマ放送局に取材してきました。みなさんはラジオがどのように送信されているか知っていますか？僕はランドマークタワーから、直接送信されていると思っていたのですが、実際は大山送信所という

場所から電波が送信されラジオが放送されるそうです。レコード室を見せていただきました。一室にCDやレコードがびっしりと棚に積まれていて、探すのが大変だと思いました。しかし、レコード室のパソコンに歌手の名前や曲の名前を入れれば、その曲が探せるようになっています。

そして、「Lovely Day」のD J 近藤さやかさんとリポーターの藤田優一さんにお会いしました。お二人に「放送の中で一番大変だったことはどんなことですか？」とお聞きしました。近藤さんによると、藤田さんの街角リポートの事件です。巨大な滑り台をすべるときに藤田さんが「それでは滑りたいと思います！3!2!1!うああ！！ブチッ」と滑ったときに携帯電話の回線が切れてしまい、街角リポートができなくなってしまったのです。近藤さんは、おたよりコーナーなどでその日を楽しんだことと、まじまじと続き、放送できていなかったことを知ったのは、帰ってきた近藤さんに言われたときだったそうです。その放送を聞いてみたかったです。(2022.7.22)

「Mulabo!」であそぼ!

小5 折下陽琉



「Mulabo!」は村田製作所のみなとみらいイノベーションセンター内にあります。村田製作所は電子部品を開発・製造・販売する会社です。

「Mulabo!」は「HISTORY ZONE」「THINK ZONE」「SYMBOL ZONE」「DISCOVER ZONE」の4つのエリアに分かれていました。ディスカバーゾーンでは、受付で端末機器を貸してもらい、ゾーン内にあるQRコードを読み込み、クイズに挑戦することができます。太陽、星、月の3つのコーナーがあり、クイズに答えた後はそれぞれのコーナーでゲームをすることができます。ぼくは「エレクトロニクスサーキット」というゲームが特におもしろいと思いま

した。終わったあと、一緒に参加していたみんなのゲームの点数のランキングが表示されました。村田製作所はよく知らなかったのですが、細かい部品を作っていて、それが身近な電気機器に使われていることがよくわかりました。また作っているロボットも展示されていて、びっくりしました。チャリーディング部というロボットが可愛かったです。細かい動きを再現できていてすごかったです。「Mulabo!」ではいろいろな体験ができるのでぜひ行ってみてください。(2022.7.28)

みなとみらいの村田製作所

高1 角田和瑛



僕たちが日々使っているスマートフォン。今回は、なんとひとつのスマホに1000個も入っている部品、コンデンサを作る村田製作所を取材しました。村田製作所は1944年に創業し、今年で78年目です。立ち上げ当初の社員は数十人だったそうですが、現在は7万を超える人々が働く大企業です。日本にとどまらず、アフリカ、オーストラリアを除く大陸すべてに製作所を持っています。

お話を聞き、村田製作所では電子部品の事業を行っていることがわかりました。具体的には、電子部品の販売の3つです。電子部品は電子回路を作成する際に必要となる部品のことで、多くの種類がありますが、村田製作所では主にコンデンサを作っています。コンデンサとは電気を蓄えたり、放出したりする部品で、コンピュータや自動車などさまざまなものに使われています。村田製作所はコンデンサをとて小さくする技術を持っており、一番小さいものは、0.25mmというサイズです。セラミックという物質の粒子をさらに細かくし、それを層にして重ねることで、小さな小さなコンデンサを作っているのです。

僕たちの生活を電気の方面から支えている村田製作所。今回の取材を

経て村田製作所という会社のすごさを実感しました。(2022.7.28)

ものづくりを通して繋がりを広げる場

中2 山本未来



以前にも取材した神奈川大学。今回はその1階にあるファブラボを取材しました。ファブラボとは、多様なデジタル工作機器を備えた実験的な市民工房です。また、世界に広がるラボと連携するグローバル・ネットワークでもあります。そのため、ファブラボは世界の色々な所にあり、それぞれが同じ機材を備えています。だからファブラボでは、ものづくりの知識やノウハウを様々な人と共有しながら、多様な機材で個人の自由なものづくりの可能性を広げることができるのです。

「ファブラボみなとみらい」にはたくさんの機械がありました。立体的な模型づくりにピッタリな3Dプリンターや光でものを削ったり切ったりするレーザー加工機、最近ではアクリルスタンドやアクリルキーホルダーによく使われるUVプリンターが置いてありました。さらに、なかなか目にする事のない大きさの大型CNCレーザーもありました。どの機器も、最初にPCでつくりたい物のデータをプログラムして、そのデータを機器に送って使います。この作業が少し難しいと感じる人が多いようです。ですが、使い方を教えてくれる講習や解説動画があるので、安心して利用することができます。スタッフの方に気軽に聞くこともできます。ラボの中には、つくったものが展示されているスペースがあり、「こんなものもつくれるのか!」と興味深かったです。



今回は特別にレーザー加工機とUVプリンターを使ってネームプレートをつくらせてもらいました。実際に作っている工程に入っていると、「どんなものがつくれそうか?どんなものをつくりたいか?」という発見ばかりでした。私は、このファブラボが、普段は違う場所にいる関わることのない様々な人達がコミュニケーションを交えながらつながり、ものづくりを楽しむことができるような場所になったらいいなと思いました。(2022.8.4)

「すごい」がひろげる豊田直之さん

高1 角田和瑛



今回は写真家の豊田直之さんにお話を伺いました。今まで撮ってきた写真や写真家になったきっかけまで、いろいろなことについて話していただきました。豊田さんのルーツは意外なところにありました。写真家になる前の豊田さんは釣り雑誌のライターをやっていたそうです。ライターとしてカメラマンに写真を撮らせてもらっていましたが、カメラマンが撮ってきた写真に納得がいかなかったこともあり、そこで考えたのが「自分で撮りに行く」ということでした。豊田さんは本格的なカメラを買い、どんどんと写真の世界へとめりこんでいきました。

あるとき、豊田さんに大きな転機が訪れます。それはキヤノンのカレンダー写真のコンペでした。最後に選ばれた人の写真がキヤノンのカレンダーに使用されるといふものです。それまで個人応募の写真家が選ばれたことはなかったのですが、豊田さんはコンペで勝ち残り、見事にキヤノンのカレンダーに採用されました。これを機に写真の仕事が入ってくるようになったそうです。

たくさん美しい写真を撮ってきた豊田さんが写真を撮る理由は

「自分がすごいと思ったものを他の人にもすごいと思ってほしい」からです。現在豊田さんは、写真を撮ることから広がり、プラごみを拾って海をきれいにする活動や、小学校などへ出張して環境講座を行うなど、活動の幅を大きく広げています。「好き」を仕事にし、それを糧にさらに仕事を広げていく。このことのごさを実感した取材でした。(2022.8.18)

megaSUPツアー@北仲フェス

小5 ピョンソヨン



横浜北仲フェスで、megaSUPツアーを取材しました。6人が乗ることのできる超大型SUPで、大岡川やみなとみらいを回るツアーです。今回はツアースタッフの齋藤さんに話を聞きました。

実際に乗ってみると、思ったよりも揺れてびっくりしましたが、6人乗りだったこともあり、すぐに立つことができました。途中で漕いでもよいと言われたので記者のみんなで漕いでみました。パドルと言うカーボン製のものでお辞儀をするように体重を乗せてこぎます。パドルはものすごく硬くてスプーンのような凹みがある部分がありました。このスプーンの窪みで水をとらえて漕ぎます。パドル自体はだいぶ軽いです実際に漕ぐ時はとても力が入りました。

進んでいくと、北仲橋の下に入りました。いつも見ている北仲橋と違って少し暗くしんとしていました。さらに進むと汽道が見え、その向こう側には遊園地がありだいぶ雰囲気が変わりました。目を凝らすと魚がところどころに跳ねていたり、うみねこが浮いているところが見えました。海の下にもすごく多くの魚が見えることがありました。

齋藤さんにSUPの楽しさについて教えてもらいました。実はこのSUPをしている人たちは、いつもは普通の会社員をしている人もいる

ため、主に休日に集まります。普通は出会えないような人たちとSUPを通して仲間になり、つながることがおもしろいと言っていました。皆さんもSUPに乗ってみてください。いろいろな新しい景色に出会えます。水は怖いですが、おもしろいという気持ちを大切にしたいと思います。(2022.10.15)

BankARTアートテーブル @高島中央公園

小5 ピョンソヨン



高島中央公園での「ポニーと遊ぶう!みなとみらい Park Day」を取材しました。ポニーが来るだけではなく、他にもいろいろなブースがあり、BankARTのアートテーブルのプロジェクトを取材しました。

みなさんはテーブルと言って何が思い浮かぶか。思い浮かぶのは足が4本あり、四角く平らで模様のないテーブルだと思います。しかし、ここで展示されていたテーブルはまったく違いました。



アートテーブルは、面白いテーブルと一緒に食べてみんながなかなか見えてほしいという目的で作られました。また、このまちに新しくキング軸と言う歩行者のための道があるので、そこを通る会社員や小学生も楽しくなるテーブルにする、というのも目的です。

面白いアートテーブルを具体的に紹介します。1つ目のテーブルは、なんとテーブルの足がカラーコーンでした。みなとみらい本町小学校で勉強しているSDGsを表すためにカラーコーンにしたそうです。テーブルの上には小学校で作った紹介冊子が置いてありました。

2つ目のテーブルは表面がふわふわしていました。また、布が所々に縫ってあります。さらに、スナックボタンも縫ってあります。これは、また同じ様なスナックボタンが縫い付けてある布を、テーブルの上で貼ったりして遊ぶテーブルです。

3つ目のテーブルはトランプの形をしていました。テーブルを作った4人がモデルになっているキング4体が、それぞれ好きな食べ物食べている様子が描かれています。新しくできる道の名前が「キング軸」なのでトランプの中にキングを描いたそうです。テーブルの上には、大きいトランプが置かれていたの自由で遊ぶことができました。記者たちみんなで、神経衰弱をしたり、トランプタワーを作ったりして遊びました。



©BankART1929 写真撮影中川達彦

4つ目は、足が2本しかないテーブルです。足が2本だったら倒れてしまいうるようですが、テーブルに付けられた紐を使う人の肩にかけて使います。持ち運びができるので、いろいろなところに持って行くことができます。

5つ目のテーブルはもともと店の看板だったものです。名前は「さまよう看板」です。テーブルの表面は砕いたガラスを固めているので凸凹していますが、それが逆にライトアップするとキラキラしてとてもきれいだそうです。

今回のイベントでは多くの人に来ていました。私たちもテントを立て、イベントのようすを取材し、公園内でこどもたちがラジオ放送する「ミニミニ放送局」を行いました!(2022.11.27)



美味しさと安全をお届けする 食材宅配生協

サステナブルなひと、生活クラブ

0120-371-902

国産 減農薬 無添加

月～土・祝 10:00～18:00

厚生労働大臣指定/専修学校 学校法人 みなとみらい学園

横浜歯科医療専門学校

Yokohama College of Dental Care and Health Science

歯科技工士学科・歯科衛生士学科

資料請求・オープンキャンパスのお申し込みは

TEL: 045-222-8678

横浜市西区高島1-2-15 2F

ルードン株式会社

MMジュニア編集局を応援しています。

www.ludens.be

ミニヨコハマシティ

ミニヨコハマシティを募集!

5才から19才までのこども市民かつやくしています。「ミニヨコハマシティ」のまちをいっしょにつくりませんか?今年も夏休みにまちを開く予定!

お問い合わせ:045-306-9004 (10時～18時 月曜休)